

転生しても

吉川 猛

毎朝きまつて七時十分に鳴き始めるセミの大合唱で目が覚めた。バイトは休みだからいつもならフトンの中でゴロゴロしてるのに、なぜか今朝はすんなりフトンから抜け出し、ソファベッドを二つに折り畳んだ。

さわやかな朝だ。セミの合間から小鳥の可憐なさえずりがこぼれてくる。昨日は給料日で仕事帰りかなり痛飲したのに、二日酔いの余韻すらない。なぜだろう？ 高級ワインのおかげにちがいない。ホテルでの仕事は先月、結婚式が立て込んだせいで超多忙、主任の求めに応じ詰め込めるだけシフトを詰め込んだ。その結果昨日の夕方ホテルを出てコンビニATMの前に立った僕は画面に映る預金残高を見て、小さなガッツポーズを決めたのだった。

そこで向かったのはいつものリーズナブルなイタリアン、つまりサイゼリヤでなく、ホテルに程近いカフェやアパレル、インテリアショップの並ぶエリアに最近出来た古民家風のビストロだった。

年齢は僕とそれほど変わらないが、ファッションや恋愛の偏差値は明らかにかけ離れた女性同士のヤカッブルばかりが座るテーブル席の一つで、黒板のおすすめに従いキッシュやフレンチおでんを注文、ワインはメニューのいちばん上を選んだ。

『旨かったよ！』

帰り際レジでウェイターに伝えた言葉、赤白のワインとブドウやリンゴの蒸留酒から生まれた酔いも手伝いさも常連風にお会計の合計金額を見て受けた衝撃をもみ消すかのように放った言葉を、この朝ふたたび心の中でつぶやいた。

そんなフランス方面から吹く微風のせいか、キッチンに立った僕はいつものインスタントコーヒでなく、実家から仕送られたステックタイプのカフェオレを一本マグカップの上で開封した。

飲みむうちに胃の底からだんだん空腹が這い上がってきた。急いで飲み干すとザツと顔を洗った。寝巻のTシャツと短パンのまま、サイフだけ持って部屋を出た。

アパートの前の坂道を下り、下り切るとすぐそこにあるコンビニを目指す足取りは軽快だった。まるで一夜にしてダイエットに成功してみたようだ。

数メートル先を腰の曲がったお婆さんが小刻みな歩幅で歩いていった。すぐに追いつき、あっけなく追い越すのもなんとなくためらわれた僕は、

「おはようございます」

のぞきこんであいさつした。

お婆さんはニット帽のねじれたつばに隠れた顔を上げることなく、

あいさつ代わりにみたいに丸めたこぶしで背中をトントン叩いた。見知らぬ人に道で「おはよう」なんて何年ぶりだろう。実際行き交う人の誰彼かまわずあいさつしたい位の気分だ。ちようど見えてきたマンシヨンの前に立つ中学生らしき男子二人に対してもだ。夏休み中部活の朝練だろうか、揃いのジャージ姿で三人目がマンシヨンから出てくると、俵型に膨れた紺のバッグを三人とも肩に担いで坂を上ってきた。ワ―ワ―甲高い声でじゃれ合いもつれ合いながら上ってきたのが、いつのまにかきれいな横並びで狭い道幅いっぱい近づいてきた。このままじゃぶつかりそうだ。

あと約五メートル、四・三・二……。

向かって左端の少年にぶつかる寸前、サツと僕は道の端に跳びのいた。喉の奥からあふれ出そうな怒声を何とか押しもどし、振り向いた。

「……あの年頃はおしゃべりに夢中……もしかすると真夏のまばゆい逆光で見えなかったのかも」

三人の頭上に輝く太陽を見つめながら、無理に微笑んだ。

ローソンの前まで来た。ゴミ箱の前ではたまに見かける汚れたベ―ジュ色の野良ネコが菓子パンの袋に鼻先を突っ込み、残った中身をくわえようとしていた。何度かエサをあげたことがある。ネコは僕の方を見るとピクツと耳を立て、じつと見つめたままの目を細くしたり丸くしたりした。

「よしよし、スナック菓子でも買ってやろう」

さっきまでの晴れやかな気持ちもどって来た。

自動ドアが開くと短いチャイムが鳴り、ひんやりした空気が流れてきた。

入ってすぐ目の前にあるエナジードリンクコーナーをグルツと迂回し、レジの前を通った。レジカウスターではこの時間帯いつもいる、髪はオールバックで上半分だけ黒縁のメガネをかけた、管理職風の中年男が出来立てのからあげクンをショ―ケ―スに入れていた。その時自動ドアが開いた。ス―ツをきっちりマネキンみたいに着こなした若い女がコツコツとヒールを鳴らして入ってきた。

「いらっしやいませ！」

アレ？　そういえばさっき僕が入ってきた時には聞こえなかったな。

微かな棘が胸に刺さり、サンドイッチの棚に目移りしてる間もチクチクうずいた。

でもすぐに忘れてしまった。たまにしかないベーグルを発見したのだ。今までは見つけても買ったことはないけど、今朝の気分にはうってつけの商品。

紙パックのドリンクコーナーへと移った。ここでも迷ったすえ、これも初めて買うスムージーを選んだ。レジへ向かうと、

「いらっしやいませ！」
 ちょうど入ってきた、上はピチピチのＴシャツ、下はダボダボの作業ズボンを穿いた筋肉質の男がまっすぐレジの前まで進み、

「ピアニシモ二つ」

店員は壁沿いにズラッと並んだタバコの列を指先でたどっているが、なかなか見つからない。客の男も身を乗り出していっしょに探した。時間がかかりそうなので僕はカウンターの隅にベールとスムージーを置き、振り向いて後ろにある、クジが当たるともらえる『鬼滅の刃』の景品コーナーを眺めた。

「ああ、これだ」

店員の声がし、商品をスキャンする音、レジが開き小銭のぶつかる音がし、

「ありがとうございます」

ドアの開く音がした。

景品一等の皿を裏返しながら、「お待ちたせしました」の声を待った。三十秒たった。待ちきれずに振り向いた。

店員はさっき僕が置いた商品を両手に一つずつ持ち、検品するかのようじつとみつめていた。首をかしげるとカウンターの隅に出たサンドイッチ・おにぎりコーナーの前に立った。ベールを棚にもどすとドリンクコーナーへと向かった。

「それ買うんだけど！」

思わず口から出そうになったが、それよりもっと言いたいことが言葉にならないまま頭の中でだんだん大きな声になってかき消してしまった。

それにもうベールやスムージーを味わう気分も台無しだった。

スムージーを棚にもどし、ついでに周辺の商品整理をしてる男の背中に向け、

「お前がいる時、二度と来ないぞ！」

声なき大声で怒鳴った。男は黙々と作業を続けていた。

店内はもう何も目に入らない、店の外ではためくトロピカルドリンクの幟しか見えない、それを目指してぐんぐん出口へと向かった。自動ドアがノロノロ開き、開きかけたガラスの角に膝をぶつけた。

『それにしてもちよつと離れたところに背を向けて立ってたとはいえ、少しでも周囲に気配りしていれば、目の前の商品をだれが・いつ・なんのためにそこに置いたのか、考えずともわかりそうなんじゃないか！』

あれでよく中間管理職が務まったものだ。前職でも下からは事あるごとに無視や反撥、上からはやんわり肩を叩かれ定年前に退職、

やむなくコンビニバイトに身をやつしたにちがいない』
 アパート目指して坂を上りながら、腹の底はブツブツ泡立ち、ま
 すます沸点に近づいていった。
 部屋にもどると、冷蔵庫を開けカルピスソーダのペットボトルを
 出すと、注いだグラスを手にドシンとベッドに座った。
 ソーダを飲み、やや冷静をとりもどすと、果たして自分に非はな
 かったかと思ひ返した。
 さっきの件に関していえば、いくら省みても反省すべき点はひと
 つも見当たらない。そもそも客はあの時点で僕しかいなかったし、
 レジの真ん前にいなくてもそこから二メートルも離れてない場所に
 立ってるのだから、見落としてしまうがよいじゃないか！
 揺らぎようなない正論の片隅にふと、ほんのささやかな呟きが洩
 れる。

『俺って、そんなに影が薄い？』

その声に呼び戻されたかのようになり、これもうつつすらのだが、コン
 ビニに入店する前の映像が巻き戻されていく。

ぶつかりそうなのに避けようともしない中学生集団・あいさつし
 ても微妙な反応しか見せないお婆ちゃん……。

「今日はツイてない、ただそれだけ」
 自分を励ますように声に出してみても、それが何の励ましにもなら
 ないただの気休めにしかすぎないのが、かえってはつきりわかって
 しまう。

今日だけじゃなく、似たようなことは過去にもあった。例
 えば……

①バイトの休憩室で仲の良い二人と三人でしゃべってる時、そのう
 ちの一人がふと目を輝かせもう一人に語りかける。相手も目を輝か
 せて合の手を入れ、ますます盛り上がりつつ二人の会話に聞き
 耳を立てるうち休憩時間は終了。

②街頭でポケットティッシュを配る慣れないスーツ姿の若い男。笑
 顔でさわやかな掛け声とともに通りゆく人々にティッシュを差し出
 すが、ほぼ無視されている。同じバイト経験を持つ僕はポケットか
 ら手を出し男の前まで来ると、わざとゆっくり歩調をゆるめる。男
 はクルッと背を向け、別の歩行者にティッシュを差し出す。

③今日みたいにもコンビニに入るとすぐそばにいた店員は無言、バ
 イト研修が成ってないのかと思いきや、次来た客には――

「これはもう、ほぼまちがいがなく、首を振って止めた。
 放つていたのか！」

そういえば最近笑顔の練習をしていない。ホテルのバイトを始め

た当初は、主任の指示もあり毎朝鏡の前で行っていた。久しぶりにやってみよう。ついでに歯も磨こう。浴室のラックから歯磨きセットを取り、洗面台の前に立った。鏡を見た瞬間、スーッと右手の力が抜けた。浴室の床でコップの撥ねる音がした。

『俺の顔がない！』

『ていうか、その下の首も肩も着てるTシャツも……ない！』
鏡には背後の壁を飾る、タペストリー風のカレンダーしか映っていない。

何かの拍子で鏡が傾いたにちがいない。そう思って真正面めがけ、どんだん近づいていった。タペストリーの中でチロル風民族衣装を着た少年少女が朗らかに踊る姿はだんだん大きくなった。

左手を伸ばして鏡の表面に触れてみる。指先を上端から下の端まで滑らせ今度は下から上へ、それを何度も繰り返し返した。そうやって擦ってるうちに、鏡の奥から本来の僕の姿が浮かんでくることを期待するみたいだ。

そういえば指も、その先の手も腕も映っていない。その時になつてやつと僕は手を止めた。体じゅうの力が抜け、壁のタイルにもたれかかると鏡に額をべったり付けた。

この状況が意味すること、それはもう一つしか考えられない。昨夜眠りについた十二時前後からさつき目覚めた七時十分の間のいつかの時刻に僕は死んでしまつて、今の今までそのことに気づいてなかったとは！

額が冷たくなってきたので鏡から顔を離した。アレッ？ 死んでも体の感覚ってあるの？

あらためて自らの全身を見回してみた。

ユニクロのTシャツにファッションセンターしまむらの短パン、そこからひよろつと伸びた日焼け跡の全くない腕と脚。生前となんら変わったところはない。

待てよ、鏡には顔や体だけじゃなく着ている服ごと何も映ってない。つまり衣類の素材も含め霊体化してしまつたというのか！ 部屋にもどって確かめた。ベッドの周りを見回しても僕が今着ている服は脱ぎ捨てられてなかった。

この現象はどういう原理のもと起きているのだろうか？ つまりどんなものでも僕が身に着けたとたん、消え失せてしまうのか？

昨日洗濯したばかりのシャツをハンガーから外して、着てみた。浴室の鏡の前にもどつた。チェック柄の半袖シャツだけ宙に浮かんでいた。

『これはつまり、亡くなった時身に着けていた、いわゆる死に装束のみ遺体とともに霊体化したということだろうか？』

ふと僕は短パンのポケットからサイフとスマホを取り出し、鏡の前にかざしてみた。

どっちも映っていない。服だけじゃなく、物品も同じ扱いらしい。でも待てよ、サイフと携帯はリュックに入れてたから、死んだ瞬間は身に着けていないはず。

この二つに共通すること、それはある一定の時間僕がそれに触れ続けていたという事実しかないはずだ。

何でもいい、その辺にあるもの、僕は浴室の床から風呂桶を掴んだ。飼ってるネコか仔犬を抱くみたいにも腕でギユツと抱きしめた。

三十分たった。そのまま鏡の前に移動した。

風呂桶は風呂桶だった。

『結局、僕にとって愛着のあるもの、特に気に入ってたり肌身離さず持ち歩いてたものだけ逝ってしまったというわけか…：棺桶に入れる副葬品みたいに』

再びベッドにぐったり腰を落とした。時計を見た。八時半過ぎ。

そろそろ暑くなり始める時刻だ。扇風機を点けた。涼しかった。風はまだ僕の存在を覚えていてくれたのか…：。

うなだれたままぼんやり部屋の絨毯やベッドの脚、そして僕自身をながめた。

質素だが掃除の行き届いた部屋の佇まい、その中にしっくり溶け込んだファストファッションに身を包む、生身にしか見えない僕の肉体。なんの変哲もないいつもの光景のはずなのに。

『初めて死んだからこの先どうなるかわからないけど、ずっとこのままの状態が続くのだろうか？』

背中に羽根が生えたみたいに重力から解放され、フワツと宙に浮いた体で飛び回ったりはできないの？』

このまま身体機能的には人並みのまま、誰からも認知されることなく未来永劫在りつづけるのか！幽霊になってまだ半日も経つてないのに、先行きのことを思うと体は宙に浮くどころか、とろろつと溶け、床に垂れていくようだった。

暑さがぐんぐん跳ね上がっていくせいでもあった。エアコンの冷房をオンにした。

『アレツ？』

流れてきたのは熱風だった。たまに起きる現象なのだ。エアコンはこの部屋に入居した当初から設置されていたもので、築四十五年のアパートにふさわしく外観はくすんだパールホワイト、機能も冷暖房が効いたり効かなかったりするのだった。

いつもの僕なら、こんな時家主や管理会社に鬱憤を募らせるのが、今は、

『それどころじゃない。というかむしろ、誰かの部屋に侵入しそこ

のエアコンをわざと冷房から暖房に切り替えてやりたい気分だ。そうでもしなきゃやっつてられないじゃないか、この先ずっと……』

心霊現象を巻き起こす霊の気持ちが悪く、この先ずっと……』
 そんなモヤモヤからふと、外へ出たくなかった。別に誰かにいたずらするためじゃなく、本当にもう、誰からも目視されない透明な存在になってしまったのか、もう一度確かめたかった。さっきはたま目に入らなかつたり無視されただけで、今は僕の視覚があるいは鏡の異常で映つてないだけかもしれないし……。

かなり無理はあるけど、そう自分に言い聞かせ、簡単な部屋の掃除をはじめた。

『もう帰ってこれないかも……』
 最後に掃除機をかけた。サイフと携帯をポケットに入れ、部屋を出た。

駅前の商店街の入口に僕は立っている。まだ朝の十時前だから開いてるのは喫茶店と弁当屋だけ、だけど昼になつても夕方を過ぎても続けて開くのは美容室や児童向け文具店など数店舗のみ、ほとんどシャッターを閉じたままだった。

だから当然人通りもまばらで、さっき子供の乗ったスケボーが走り去ってからまだ誰もやっつて来ない。

やっつと今喫茶店から出てきた、ピンクのヒョウ柄シャツを着たおばさんは前に停めた自転車に乗ると、こっちに向けペダルを漕ぎ出した。

『スケボーとか自転車はちょっと危ないな。もう少し待とう』
 屈強すぎず、かといって軟弱すぎない、できれば僕に似通った背格好の、自分の足で歩いてる人物。

つまり今から、正面衝突する相手を捜してるのだ。

朝方の中学生は僕の方からよけたけど、面と向かつてぶつかつたら？——生身の人どうしみたいにとちらもバタツと倒れたり「痛ッ！」と叫んだりするのか、それともプロジェクトンマッピングみたい僕と僕の体を相手はスーッと通り抜け、何事もなく行つてしまふのか。

恰好の人物が向こうから来た。身長百六十センチ前後、僕よりも痩せた営業マン風の若い男が街並の所々をスマホと見比べながら歩いてきた。僕は目測で男の真正面に立ち、男と同じ位の歩調で距離を縮めていった。

「ア痛ッ！」

ぶつかつた瞬間、思わず叫び路上に仰向けで倒れたのは僕だけだった。男は一瞬立ち止まり、僕の倒れている路面にチラッと目を落とすか落とさないかのしぐさを見せると、またキョロキョロ辺りを

見回しながら遠のいていった。

いちおう固体としての物質性を保ってはいるが、抵抗力は一般人と比べかなり弱ってるようだ。

『帰ったほうがよさそうだな』

けれど足は動かなかった。いつもなら根っからのインドア派で、休みの日もほとんど出歩かないのに、今は帰りたくなかった。

『なぜなら今まで質素だが清潔で居心地のよかった部屋は、質素で清潔な墓穴へと用途変更してしまったから』

ジリジリ照りつける日差しを避け、商店街の角にある『本日休診』の札が掛かった歯医者 の庇の陰に入った。だんだん喉が乾いてきたし、さっきより空腹も感じ出した。そういえばこれから飲食はどうすれば？ 僕以外の『さまよえる魂』の方々はどうされているんだろう？ たずねてみたい気持ちでいっぱいだ。

大通りの舗道を歩いてる人々を一人一人じっくり観察した。誰も彼も全身にキラキラ光を撥ね返し明るい表通りを歩き来していた。とくに影の薄いシルエットは見当たらない。たまたま今はいないだけなのか、同類でありながら僕に識別能力が欠けているのか。

そもそも霊と人の違いって、透明な体以外に何？ 今まで経験した限り、デメリットの面だけ人並かそれ以上で、反面特別なメリットは皆無じゃないか！

喉の乾きが限界に達した。横に立つ自販機でドリンクを買おうと、ポケットのサイフに手を伸ばした。でもやはり人目が気になり、誰もいない場所で買うことにした。とりあえず暑さ対策として地下鉄の構内に入ろう。駅へ下りていく階段を目指した。

駅の改札口へ向かう地下道の、並んで壁から突き出たAEDと自販機の間 の凹みに身を潜ませている。ここなら誰かにぶつかる心配はない。

人並みが途絶えた時、ドリンクを買おうとして、やっぱりやめた。もしも買えたとして、それを誰にも怪しまれずに飲み干せたとして、透明な体内に摂取した液体はどう人の目に映るのだろうか？ それにそのあとしばらくたって尿意を催した時にはどうすれば？

『検証すべき課題は山積みだ。ポーツと突っ立ってる場合じゃないぞ、まるで地縛霊みたいに。今すぐ誰かに相談を』

ポケットから携帯を取り出し、数少ない友達のうち一番ヒマそうな男の番号を押した。発信音が鳴った。ほんとにつながってるのかわからないけど。二十回鳴らしても出なかったので切った。

壁沿いに背中をくつつけたまま横歩きし、改札の斜め前まで来た。毎朝の出勤で利用している路線、乗り換えなしで六駅十分足らずでバイト先の最寄り駅に到着する。改札を出入りする乗降客は発着

のたびに五名前後、町そのものが閑散としてるからラッシュアワーを過ぎるといつもこんな風にひっそりした佇まいだ。とりあえずホームまで誰にもぶつからずにたどり着くのは何とかなりそう。問題はそのあと乗車してから、都心に近づくにつれ混み合っている車内が思い浮かぶと、足がすくんだ。でもひしひしと迫りくる将来への不安、というより人としての将来も不安も突如かき消されてしまったこの苦しみ、いや苦しきというのも人がもつ感情だからちがうな、とにかく言葉では言い表せぬこの状態を相談できる相手といえれば、休憩中の食堂や喫煙所で話し相手も豊富なあのホテルにしか今はいない。僕は改札口へ向け通路をすばやく横切った。実験のため、わざとカードを出さずそのまま自動改札機内に侵入した。すぐさまピンポンと音が鳴り、黄色いクッションが両手でブロックした。事務所の奥のデスクでうつむいてた駅員が顔を上げた。僕は二、三步後戻りし、サイフから出したカードでタッチした。黄色い手が開いた。急いで走り抜けると、そのままホームへ向かう階段を駆け下りた。

もうすぐホテルの最寄り駅に着く。乗った時はガラガラだった車内が今はもう、さまざまな色と形の髪をのせた人の頭でいっぱいだった。ぼんやり目を細めて眺めていると、だんだん髪の毛どうしがつながり合って、まるで一枚の大きな黒っぽい毛布にみえてきた。なぜこんな風に上空から見下ろした視線かというのと、とうとう僕の体は重力から解き放たれ一般的な靈魂のイメージどおりフワッと宙に浮いてるから、じゃない。網棚の上に座ってるからだ。

生まれつき小柄で動きも俊敏なため、高校時代は体操部にスカウトされ即入部(一週間で辞めたが)、なので車内が混み合ってきた頃、吊革に両手を掛け座席の側面に足をのせると、そのままスルスル網棚まで登りつくのはたやすい技だった。

それにしても狭い。体育座りで限りなく身を縮めているのに、背中ではペツタリ天井に貼り付いている。

到着を告げるアナウンスが日本語と英語と中国語で流れ、電車が止まった。ドアが開くと頭はいっせいに揺れ、ゆるやかなうねりとともにほとんど外に吐き出されていった。

そろそろ人波の最後尾が見えなくなりかけた時、僕は天井から床まで伸びた手すりに腕と脚を巻き付けしがみつく、ツルツル滑り下りていった。

ドアの両側から押し寄せてきた乗客と入れ違いにホームへ飛び下りた。すぐさま近くに立つ柱の陰にサッと隠れた。人混みでこった返すホームの数メートル先に階段と上り方向のエ

スカレーターがみえた。
 目の前を行き過ぎてゆく一人一人の骨格と肉付きをじっくり見比べた。やがて身長一八五〇cm、がっしりした肩幅のワークシヤツを着た男が通りかかると、すばやく背後に回り込んだ。そのままピツタリ付かず離れず、エスカレーターの歩かないほうの列に並んだ。
 男に貼り付いたまま改札を抜け、階段を登って地上に出た。近未来都市を思わせる、全体にシルバーがかつた光を放つ金属とガラスでできた巨大な立体交差点が目の前にそびえていた。
 その壮麗な景色のなるべく端っこを、前から次々やって来る人を小刻みなステップでよけながら歩いた。横断歩道では白いラインを大きく逸れ、車と車の間を駆け抜けた。
 ビルの谷間を見上げると、奥のほうに真つ白な超高層ホテルが日光を浴びて輝いていた。
 足元の舗道はいつしかピカピカ鼠色に光る石で、丸くゆるやかに広がったそれが階段状に上までつづいている。登りきると大きな円形の広場で、ジェラートやピザやビールの屋台が並んでいた。
 屋台の間をすり抜け奥のほうに進んでいくとビルに挟まれどんと狭くなつて、突き当たるとホテルの従業員向け通用門があった。
 狭い通路の入口付近の壁にもたれて誰かが来るのを待った。すぐにガチャピンプムのトートバッグを肩に掛けた浅黒い小柄な女が通路に入った。ベッドメイク担当のアンジェリーナだ。きびきびした彼女の歩調に合わせ、後につづいた。
 行き止まりの自動ドアの前まで来るとアンジェリーナは右側の壁から突き出たカウンターの上のペンを取り、バインダーに挟んだ紙に所属部署と名前を書いた。カウンター前のガラスの小窓がガラツと開き、
 「ハイ、アンジー！　アユーオーライ？」
 警備員の制服を着た、ちよつと欧米風な顔立ちをした白髪の男が薄い色のサングラス越しに目を細めていた。
 アンジーは右頬だけゆがめて笑うと、ちょうど開いた自動ドアの向こうへ素早く踏み入った。空いたすき間に僕も身をねじ込んだ。
 エレベーターホールまで行くのと、扉の前で立ち止まり上りのボタンを押した彼女から離れ、階段へと向かった。
 同じ階にチャペルのあるそのフロアは結婚式のない日は薄暗くひっそりしていた。
 壁と一体化してよく見ないと気がつかない非常階段の扉の前まで来た。ドアの取っ手をひねりグツと引くがなかなか開かない。普段からは重い扉だが、いつも以上の重さだ。やっぱり力の弱まっているの

いきなりフワツと突風が吹き抜けたように扉が開いた。マネージャーが着る臙脂色のスーツの肩と袖が現れた。それからテカテカ光る塗り固めた髪、爬虫類系の細長くてアクの強い顔立ち。

「おはようございます！」

反射的に口走ったあと、しまった！ 口を押えた。

マネージャーに反応はなく、長身をやや折り曲げた優雅な身のこなしでチャペルのほうへ歩み去った。

「すると僕は体が見えないだけじゃなく、声まで全然聞こえてないのか！」

がつくり扉に手をついたが、すぐに立ち直った。あいさつしても無反応なのはいつもどおりなのだった。つまりマネージャーにとつて僕はそもそも始めから幽霊だった。

十四階まで登ると息も絶え絶えだった。そっと扉を押し誰もこつちを見てないのを確かめると、フロアに忍び入った。

十四階には僕がバイト契約している食器洗浄会社『せせらぎホールディング』の事務所がある。同じフロアには披露宴やディナーショーに使われる宴会場もあるから、事務所の前にはボーリングのレーンを思わせる長いコンベア式の食洗器が二本伸びている。

その二本の間でベルトにもたれスタッフが三人、陽気に会話を弾ませていた。三人とも目が痛くなりそうな鮮やかなブルーのポロシヤツとキャップ、対照的に地味なベージュのチノパンを身に付けている。ホテル内ではスチュワードと呼ばれる食洗スタッフの制服だった。

自分の着てる服を眺め下ろした。カラーコーディネートがよく似ていた。だからというわけじゃなく、いつもの習性で近づいていき彼らの輪に加わった。甲子園で開催中の夏の高校野球の話で盛り上がった。

「昼飯食いながら見てたらサイレンが鳴って、球児が皆帽子を取って黙とうを捧げるだろ、そしたら向こうに座ってた支配人がいきなり立っていっしょに黙とうを始めたわけさ。」

さすがだね、対戦国アメリカの人間なのに、やっぱり違うね、世界三大ホテルともなりやあー

ホテルは外資系で支配人始め上層部には外国人が多かった。

「へえ、ところで石橋さん、戦争行ってたんすか？」

僕より五、六コ下、大学生の関が六十代の石橋さんにいった。関が通うのは偏差値の高い有名大だから、もちろんからかっていって

るのだ。

「おいおい、石橋さん俺らよりITにくわしいだろ、見てみるこの

時計——」

石橋さんのアップルウォッチを指して僕もいつてみた。言い終えるまもなく石橋さんは、

「潜水艦で真珠湾まで……」

偽の戦争体験談を語り出した。やっぱりきこえてない。

何度か飲みに行ったこともある二人なのに、コツコツ育んできた親しみも今更もう何の役にも立たないのか。

こうなったらあとは靈感の強そうな人物、そこに的を絞るしかない。

念のために、石橋さんと関の会話を黙って聞いている、名前は忘れたが最近入った女の子の前で思い切り手を振ってみた。すぐにあきらめ、その場を離れた。

事務所の前まで来ると、大きな分厚いガラス窓から中をのぞいた。ホテルの食洗担当マネージャー下田さんとせせらぎサービスの現場主任本間さんが膝をつき合わせて座っていた。

下田さんはオフィスチェアの上で小さな体をグニャッとねじ曲げ、肘掛けの片方に全体重をのせていた。何かしゃべってる唇は笑っていたが、銀縁メガネの奥の目は笑ってなかった。本間さんは円い回転イスの上で力士並の巨体を可能な限り縮め、下を向いてうなずいていた。

イスの座り方ひとつで、親会社と下請け零細企業の関係性を「これでもか！」というくらい明確に表現している。もしもドラマでこれと同じシーンを観たなら「さすがにやりすぎ……」誰しも首をひねるにちがいない。

二人の顔をじつと見比べる。本間さん・四十代・バツイチ・シングルファザー・息子はニート、下田さん・三十代・妻は元CA・娘はインターナショナルスクール。靈感がありそうなのは……

本間さんに向け好意的に注がれていた僕の視線は、

「……ないな」
見極めると、下田さんに向け窓ガラスをコツコツ叩き全身で訴えた。

チラッと窓のほうを見た下田さんは、またグイッと本間さんに視線を据え直し、心置きなく口撃を再開した。

来た時よりもっとうなだれた姿勢のまま、僕はもと来た経路をたどった。

バイト仲間たちの歓談はいつそう賑わっていた。まだ戦争の話をしていて。僕は振り返ることなく非常階段の入口まで戻り、扉を細く開けた。

「えっ、日本とアメリカって戦争してたんですか？」
閉まっていく扉の向こうで、女の子の声が小さくきこえた。

：三十九、四十！ やつと四十階だ。目標まであと五階。とりあえずひと休みしよう。僕は踊り場にドサツと身を投げ出した。これで四度目の小休止だ。シャツの袖で額の汗をぬぐった。シャツはさつきまで着ていたＴシャツでなく、同じ青でもポロシャツだった。さつき制服に着替えたのだ。

最初のうち、どうせ見えないのだからそのままの私服でいいやと階段を登っていたのが、

『でも待てよ、今向かつてるのはレストランの厨房、足を踏み入れたとたん、もしも奇跡的に僕が突然蘇り、衆人の目にさらされたとしたら：何より清潔をモットーにする職場、その場でクビは目に見えている』

引き返して十四階の更衣室で制服に着替えたのだった。ロッカーの鏡をのぞいてみたが、制服ごと何も映ってなかった。

疲れたからひと休みしてると自分で自分にいいながら、心の隅でわかっていた、ほんとは出口の扉の上で光る数字がだんだん大きくなって目標の45に近づいていくのが怖いだけだ。

今から会おうとしている人、その人物ともしも何のコンタクトも取れなかったとしたら、親しい知人から認知される望みはほぼ消え失せ、僕はもはや架空の存在と化してしまふのだから。

とうとう四十五階まで来た。ドアノブをギュッと握ったままじつとしてみると、心臓がズキズキ早打ちしているのがわかる。ところで心臓ってまだ動いているの？ もしここでもう一回止まったら、もう一回死ぬの？

いきなり手の中のドアノブがグルッと回った。短く叫ぶと同時に離れた。ボタンと扉が開き、白くて背の高い帽子に白い服を着た男が飛び出してきた。片手に皿、もう片手で皿の上に伏せた円い銀のフタを押さえながら駆け下りていった。もうすぐランチタイムだ。厨房が一挙にあわただしくなる前に行かなくては。

ふたたび閉まった扉をほんのちよつと浮かせた。食器どうしのぶつかる音や、料理の焼ける音、弾ける音、怒鳴り声にも似た話し声がワツと流れてきた。

ひと思いに扉へ全体重をのせグツと押し開けた。この喧噪のなか誰も注目してないだろうし、目撃したとしても忙殺で無視されてしまふだろう。

フロアに出ると、左手にレストランの広い厨房がみえた。白服白帽のコックたちが四倍速みたいな動きでフライパンや包丁を動かす、スローモーションみたいな動きで皿に盛り付けていた。

真正面では洗浄機のコンベアが低くうなり、四人のバイト仲間たちがその周りで動いていた。まだ客は少ないから皿はほとんどなく、ナベやレードルなど調理器具を下洗いして食洗器へ投入、出てきた

ものを拭いたりしていた。

僕は壁際に沿って忍者みたいにコソコソ右のほうへと進んでいく。あたりの空気はだんだんひっそり、レストランのけたたましさがスピーカーを通したみたいに小さくこえる。そこはルームサービスの用のサンドイッチやパスタを作るコーナーで、若手俳優の誰かと誰かに似たコックが二人、静かな声でサッカーの話しながら何かを刻んでいた。

そこを過ぎるとガラスの自動ドアだった。壁に貼り付いたまましばらく待った。五分以上たつてようやくドアが開き、トレイを持ちコンシェルジュのバッジを付けた濃いメイクの中年女性が近づいてきた。眉間に刻まれていた深い皺が二人の前に来るとスーッと消えた。

「イカ墨のドリアって出来ます？」

ねっとりした声で問うコンシェルジュの横を通り過ぎた。

ドアの向こうに足を踏み入れた瞬間、フワツと甘い香りに包み込まれた。ここにもさっきみたいにゆったりくつろいだ空気の中、密やかな話し声もれ、微かな笑い声さえ混っていた。

「スペイン料理でどこかい店知ってます？」

「スペインはあんまり……地中海つながりでギリシャ料理なんてどう？」

僕と同世代の若い男女、けれど明らかに異空間な会話があちこちから聞かれた。

側面に冷蔵庫の扉がいくつも付いた、室内プールみたいに広くて長い台が真ん中にある、その上でボウルやトレイや泡立て器や漉し器が銀色にキラキラ輝いていた。台の周りには十人以上の、白衣に白い頭巾、青いゴム手袋をしたパティシエたちが、みんな下を向いて色とりどりのクリームやスポンジやフルーツを切ったりのせたりしていた。

すぐにいつもの場所に立って作業してる鳥越マキを見つけた。

マキ（漢字を知らないのでカタカナでしか書けない）とは、シェフパティシエの徳井さんが企画したパティシエ、コック、サービスマスチュワードを交えた飲み会で初めて言葉を交わした。徳井さんはパティシエのトップなのにフレンドリーな人で、たとえば我々スチュワードが挨拶しても無視して通り過ぎていくシェフやソムリエが多いなか、挨拶は丁重におじぎ、同じエレベーターに乗り合わせた時など気さくに話しかけてくれた。まあ話題はアダルトビデオなど下ネタが多かったが。

飲み会はホテル近くのチェーン店の個室居酒屋で行われた。乾杯のあとしばらくのうち同業者どうしで喋り合っていたがこちない空気も、酔いが回るにつれみるみる泡とともに弾けていった。鳥越マ

キを除いて。

僕の向かい、つまり長テーブルの端っこに座りたまにカシスオレンジを飲む以外ほとんど口を開かないマキをチラチラ見ると、「気にしなくてOK、いつものマキちゃんだから。つまんなそうに見える、これでけっこう楽しんでいるスタイル」

髪の毛の中央部をシャチホコ状に逆立てたとなりのパティシエが僕の肩を叩いていった。

そのうちすぐ横で始まったショットグラスによるジン一気飲み大会にイヤイヤ参加していると、アイスペールの中の氷より速く僕の脳味噌も溶けていった。

時間がたつにつれ自然いくつかのグループに分かれていき、みんなの顔と姿勢は崩れていった。

いつのまにか一人ポツンと取り残されていた。あいかわらず一人ポツンとしてるマキが目にと映ると、

「初期のスヌーピーだ、まだ四本脚で歩く普通の犬だった頃の」マキのトレーナーに付いたプリントを見て、ろれつの回らない舌で語っていた。

かすんでよく見えないマキの顔の中で唇が動いていた。そのあと完全に意識は飛んだが、翌朝起きてスマホを見るとマキとLINE友達になっていた。

それから二、三日おきにメッセージを送り合うようになり、伊勢のスヌーピー村に二人で行く約束をした。予定は来週の水曜日、つまり四日後。

『それまでに何とかしなければ。マキさえOKなら僕としては最悪、今の透明な姿のまま伊勢まで行ってもかまわないのだが……』

「おはよう」
「なんの反応もなかった。肩を軽く突いてみた。やはりノーリアクション。」

マキの白服の裾に僕のポロシャツの裾が触れ合うほどに近づいた。まっすぐ立つと僕より背は高いが、前屈みになって何かしていた。横からのぞき込むと、黄色い生地の上で太いめん棒をコロコロ転がしている。

不意にマキの両手に両手を重ね、いっしょに生地を伸ばしたい衝動が走った。映画『ゴースト/ニューヨークの幻』のろくろを回す名シーンみたいだ。

あわてて首を振り、マキの傍から一步跳び退いた。

『あれは熱い恋人どうしだから感動的なシーンなんで……まだデートすらしてない身分で……これじゃまるで『透明人間』になった男が真っ先に思い浮かべるセクハラ同然じゃないか！』

なんとかしてマキに、とりあえずここにいることを、それもなるべくソフトタッチで伝える方法……。

「そうだ、ずいぶん弱ってるとはいえ、ドアを開け閉めする指の力が残されてるなら。」

僕は調理台に近づいた。マキの転がすめん棒の回転の隙をついて生地の間を指先でグッと押し込んだ。感触はほとんどなかったが、うっすら生地は凹んでいた。でもめん棒がすぐに消した。

「今度は爪の先でシュッとこすった。ナイフで切ったみたいで鋭い傷が出来、それもすぐ消された。」

「これなら文字も書けそうだ。最初のうち地味な線や穴を残していき、アレおかしいなとマキが手を止めたタイミングで生地に綴られていくメッセージ。」

「文面に思い悩んでるうち、もっと簡単な方法に気がついた。さっき電車に乗る前、友達に電話してつながらなかったけど、いちおう発信音は鳴ってたじゃないか。」

「そうだ、LINEしてみよう。」

「けれどツールが便利化しただけで、文面はやはり難しい。悩みぬいたすえ、ひねり出したのは。」

「心の目をひらいて感じてほしい。すぐそばにいることを。」

「『ひらいて』まで打ち込んだ時、あまりに安っぽいポエムなことに落胆、消すことにした。削除ボタンに下ろそうとして僕の指は送信の青いボタンの上を通過——」

「アッ！」

「通過しただけなのに、押しでなんかないはずなのに、送信完了してしまった。」

「生身の人は持ち合わせていない、超常的だけど全くムダな能力を身に付けてしまった……。」

「マキのポケットの中で微かなバイブ音が鳴った。」

「出ているよ。」

「向かいの調理台でクリームを泡立ててるパティシエの男がいった。マキは頭を軽く下げると、右手の手袋を外してポケットに入れた。」

「まだ間に合う、マキが画面を開く前に削除しよう」とボタンを探すが焦って手が震え今度は指先がその上まで行かない。」

「既読が付いた。マキはスマホを半分だけ出して画面をのぞいていた。すぐに手袋をはめ直し作業にもどった。」

「何笑ってるの？ うれしいことでも？」

「しなやかな体つき、スベスベした顔に眉毛もきれいに剃った向かいの男がまたいった。」

「『ていうか、何かおかしなLINEが』」

「へえ、どんな？」

うーんと首をかしげながらめん棒を転がしていたが、しばらくして

「スヌーピー村って行ったことあります？」

顔を上げずに男にきいた。

「ないけど：：そのうち行ってみたいね。でもまあ、言っちゃ悪いけど、みんなスヌーピーを誤解してるよ」

「そうなんですか？」

「スヌーピーの口癖、知ってる？」

「しゃべるんですか？」

「四コマ漫画ではね。親友のウッドストックによく言うのは、『僕は君のことに構わないから、君も僕のことには構わないでくれ』つまりみんなが思ってるような明るく元気なキャラじゃない。可愛いけど、オープンで社交的な性格ではない」

そのあと男は、文庫本『ついてない時、心が晴れるスヌーピー』に書かれていたから僕も知ってるスヌーピー話を軽妙に語り続けた。その場から離れた僕は調理場の奥、壁と壁が入り組んで扉のない小部屋のような一画へと向かった。ポツンと孤立した感じのその空間に、僕も週一で入るペストリーの洗い場があった。

食洗スタッフは食事休憩に出かけたらしく、今は誰もいなかった。シンクにはポールやゴムベラやナイフがごちゃ混ぜに重なり、飛び散ったクリームが流しの周りのステンレスに垂れていた。

僕は水道の赤い蛇口をひねってお湯を出した。しばらく出し続け、音を聞きつけた誰かが来ないのを確かめると、まずシンクの周りの汚れをスポンジでサツと落とした。次に前方の棚に立てかけた水切りカゴを下ろし、これもサツとお湯でゆすぐと流し台の横にセット、シンクに溜まった調理器具を小さな物から一つ一つ洗いはじめた。

日々の熟練のなせる技か、洗い物作業は快調だった。みるみる片づいていくシンクの中、同じ種類ごとに積み上がっていく水切りカゴの中を見ると、だんだん楽しくなってきた。

楽し過ぎて、まるで人の気配を感じなかった。いきなり斜め後ろからシンクめがけお玉が飛び込んできた。振り向くと、度の強そうなメガネに小太りの、ちよつとオタク風なパティシエが目を見開いてこつちを見ていた。

「おつかれさまです！ 非番ですが、ヘルプで入ってます」

もちろんそれには答えず、無言のまま大股で歩み寄った男は蛇口をひねって水道を止め、また大股に歩み去った。

入口のほうにチラチラ気を配りながら洗い終えた器具を拭き上げてると、休憩からもどったスタッフがこちらに近づいてきた。見覚えのあるおばさんだが、あいさつ程度の交流しかない。僕はタオル

をハンガーに掛け、

「ああ、溜まってきてたのでお手伝いさせてもらいました」

「おばさんは僕の前をスーッと通り過ぎると、

「まあ、どこのどなたか存じませんが、ご親切に」

積み上げたボウルに向かつて、深々とおじぎした。

僕はおじぎを返すと、クルッと背を向け出口へ向かった。

なんとか対策を立て直さなければ。

フサフサした毛皮の細長いソファの隅っこにガツクリ腰を落とし、うなだれて膝にくっついた頭の中心を無理矢理めぐらせた。

僕が今いるのは芸能人の多く住む高級マンションのロビーだった。ホテルを出たあと、すぐ向かいに立つこのマンションへ、サンダラスを掛け花柄のワンピースをなびかせたマダムの後について侵入した。ひんやりとちようど心地いい温度の冷房、壁の油絵や細かな模様をついた彫刻みたいな柱は西洋の城みたいだ。

さつきは電話がつかながらなかつたけど、とりあえず友達の家に行ってみよう。おそらく他の人たち同様、乾からみて僕の姿は影も形もないし言葉も通じないだろうが、高級羽根布団並みに軟弱とはいえ、体の反撥力は残ってる。ちよつと強引だが、タックルやパンチ、キック、チョーク攻撃など手荒なボディーランゲージでなんとか存在を主張しよう。

『そこでどうとう僕の存在は証明され、それから、それから……』

うつすら目を開けた。携帯を見ると、午後四時過ぎ。三時間以上も眠ってしまったようだ。

『待てよ、もしかすると……』

朝からの一部始終はすべて長い入り組んだ夢の中の出来事で、目が覚め辺りを見回すと、見慣れた布団の中だった——なんてことはなく、やっぱりラグジュアリーなソファの上だった。

マンションを出て、都心に向かつていた朝とは反対方向の電車に乗ると、車内はガラガラだった。両端に一人ずつしか座ってないシートの中の真ん中に、『千と千尋』のカオナシみたいにひっそり座った。カオナシとの違いはドアが開くたび誰かがこの辺に座りに来るんじゃないかと絶えずヒリヒリしていること、あんなにボーツと座ってはいない。

私鉄に乗り入れる路線に乗り換えるためいったん降り、向かいのホームに立つとわざと二、三本見送ってから乗った。けれど乾の家最寄り駅には五時前に着いてしまった。

改札を出るとロータリーの周りをグルッと眺め回し、時間がつづせそうな店を探した。町中華、美容室、ブティック、不動産屋、整

骨院。どれも客の少なさそうな店構えだが、ひと休みには最適じゃない。結局パチンコ屋に入り、人気のない機種の前に座って小一時間過ごした。

六時十分前になるとパチンコ屋を出て改札の斜め前にある駅周辺案内図の横に立った。来た時よりも降りてくる客は全然増えていて、スーツを着た若い男もけっこういるから、その中から乾の姿を見つけて出すのに油断は禁物だ。

乾とは大学時代、バイト先のファミレスで知り合った。二人とも四年で卒業後も就職が決まらず、惰性的にそのバイトを続けていくうち、互いに慰め合い、励まし合うといった形で親交を深めていった。一時は週四でお互いの部屋を行き来する仲だった。

ただ、今年になって乾の携帯会社への就職が決まり、二人の仲は急速に冷え込みつつあるのが不安の種だが。

六時十分になっても見当たらなかった。疲れてきたので案内板の前に移動してもたれた。

同じ二つの麦わら帽を被った小さな男の子と小柄なお婆さんが手をつないでゆっくり近づいてきた。

あわや正面衝突！ と思いきや、ギリギリ僕の手前で立ち止まったお婆さんは何か呟きながら、僕の体を透かしてその向こうの地図をじっと見つめた。

「あつた！」

いきなり男の子が手に持ったガリガリ君の先を地図に向け、どこか一地点を差した。短パンの下から出た僕のすねに当たった。冷たかった。

だんだん脚が疲れてその場にしゃがみ出した頃、やっと改札口に乾の姿が見えた。

ネクタイはしてるけどカジュアルなチェックのシャツとパンツでさわやかなクルビズスタイルの乾は、肘からバッグをぶら下げた左手にエナジードリンク、右手のスマホをのぞき込みながら速足でこっちに向かってきた。

僕は彼の進路を目線でたどり行き先に立った。すれちがう時、「久しぶり！」

思い切り肩を叩いた。でもやっぱり、チラッと横目で見ただけ。乾の後ろから数メートル離れてついていった。ロータリーを横切ると、両側にチェーン店の居酒屋やマッサージ店、ガールズバー、スナック、キャバクラの並ぶ通りに入った。

「お兄さん、このあとのご予定は？」

「一時間三千五百円！」

「可愛い子いっぱいいますよ」

二、三步進むごとに声が飛んできた。乾はあいかわらず携帯に目を

落としたまま、
「けっこうです」「今日はいいいす」「ありがとう」
「いちいち返事しながら散歩でも楽しんでるみたいにゆったり歩いた。」

光る看板やネオンの並びが尽きると、急に静かな住宅街だった。古くて小ぢんまりした一軒家やアパート、マンションが車一台なるとか通れそうな道を挟んでずっと先まで続いていた。空にはまだ明るさが残っていたが、路地の奥のほうは薄暗かった。

携帯をカバンにしまった乾は急にきびきびした動きを背中に見せ、少しづつ遠ざかっていった。僕も足を速めた。履いてるサンダルのかかとがピタピタ鳴った。

ゆっくりと乾が振り向き、立ち止まった。僕も止まった。誰もいない路地をしばらく見つめていた乾はハハと甲高い笑いを響かせる、向き直りまたスタスタ歩き出した。僕も歩調を合わせて歩いた、サンダルを鳴らして。

すぐに立ち止まりハツと一瞬だけ振り向いた乾は、カバンを胸に抱え前のめりになると、漏れる寸前トイレに駆け込む時みたいにせかせか足を繰り返り出し始めた。僕もまたそれにならった。

曲がり角を二度曲がるうち、もう乾は疾走状態に突入していた。乾の住むマンションが見えてきた。玄関の自動ドアに一瞬で着いた。手が震えてなかなかキーが刺さらない。

やっと差し込んで回すとノロノロドアが開いた。部屋は一階だからロビーを突っ切ったらすぐだ。前まで来た。今度もキーが刺さらない。刺さった、回した、開いた。

開いたとたん、部屋の奥から鳴き声がして乾の愛犬、フレンチブルドッグのチャンピーが駆け寄ってきた。いつものように乾の首に飛びつき、乾はチャンピーの頭をクシヤクシヤ撫で回す――はずだった。

靴脱ぎ場の前まで舌を出し嬉々として駆けつけてきたチャンピーは急に固まったように立ち止まった。スーッと舌を引っ込めると、閉じた口の中で低くうなり始めた。不意に跳びはね、横ざまに乾をすり抜けると乾の背後、僕に向かって吠えたてた。

「どうしたんだよ、誰もいないじゃないか。そうだろ、誰もいないって！」

そういうと乾はなおも吠え続けるチャンピーを無理矢理ギョッと抱きしめ、ドアをボタンと閉めた。危うく挟まれそうになったが、ギリギリのタイミングで僕は滑り込んだ。

「どうあえずチャンピーを落ち着かせないと。ひどいなあ、ササミあげたことあるだろ」

満面の作り笑いを浮かべポンポン両手を叩きながら近づいていくと、チャンピの鼻先で両手をパツと広げた。犬はひと声甲高く鳴いたあと、パタンと前肢を折り畳み床に腹を付ける。僕の手の平をペロペロ舐めた。僕はツルツルした頭を念入りに撫で回すと手を引っ込めた。

あいかわらず乾はカバンを胸に抱え、突っ立ったまま部屋の隅で固まっていた。チャンピの動きにじっと目を凝らしている。

僕はポケットから携帯を出した。LINEを開き、乾のトーク画面を開くと文字を入力した。

『信じられないだろうけど、今お前の目の前にいる』

カバンの中で短い音なり音がしたとたん、乾はアッ！と叫び、

カバンを投げ出した。恐る恐る近づきチャックを開けると携帯を探り出した。目をつぶったまま電源を切ってしまった。

キッチンへと駆け込んだ乾は、いきなり冷蔵庫を開けると扉の柵からアジシオのビンをつかんだ。玄関に引き返すとビンのフタを開け逆さに向け、すさまじい勢いで土間帯に振りかけはじめた。僕の脛から足の甲にかけて、パラパラと降りかかっては汗にまみれ淡雪のようにすぐ消えた。

アジシオを左手に持ち変えた乾は急に僕の方へ倒れかかるように爪先立ち、ドアの上方に右手を伸ばした。ベリツとテープを剥がす音がした。右手に神社のお札があった。すぐに背を返し、そのままリビングへダッシュ、キッチンとの間の引き戸を大きな音を立てて閉めた。

激しくどこかを開け閉めする音がリビングの中でしていた。すぐに静かになった。

僕はサンダルを脱ぎ、キッチンへ上がった。まっすぐ進み、そつと引き戸を開けた。

床の中央に布団が敷いてあった。その上で掛け布団を頭から被つて乾は寝ていた。

僕は片足だけ部屋に踏み入り、半身で布団に近づいた。そつと掛け布団の端を上げた。枕元にお札とアジシオがのぞいていた。

「寝る前に玄関のカギ掛けとけよ」

戸を閉めキッチンにもどった。なおも脚にじゃれかかるチャンピをやりわり引きはがすと、ドアを開けて出ていった。

真夜中の午前二時過ぎ。寝つかれないまま僕はリクライニングを倒したままのソファから腕だけ伸ばし、もう何十回目かスマホをデスクの上から持ち上げた。

鳥越マキからは夕方の四時頃LINEが来ていた。返信が遅かったのは、どう書けばいいのか答えに困ったからにちがいない。悩ん

だすえ入力したのはたつたの三文字「えっ？」
 けれども、そのことは活動の場を二次元に移しても変わりなく、文字数はきわめて少ないのは事実なのだ。

『じゃあ、このあとどう返せば？　こんなことなら乾に送ったみたいにとストレートな文面にすればよかった。下手に詩的なワードをちりばめた自分が死ぬほどイヤ：：』

乾の部屋を出た僕が今そんな後悔の念にさいなまれてるのは、ネットカフェのボックス席の中だ。今日一日で自分の身に降りかかった事の重みに心身ともにグッタリ疲れ果て、さすがにこれから自室にもどるのもめんどくさく、ついふらふら駅前の繁華街にひっそり佇む客の少なそうなネットカフェの入口をくぐっていった。

いつもなら堅く冷たくどこまでも事務的なマキの文字列からなんとか心情をくみ取り、よりポジティブなメッセージを引き出せるよう後押しするのが僕の役目なのに、今はすっかり立場が逆転してしまった。

空気のような、目に見えない空気中の微粒子の集合体のような僕という存在をマキにこそ何とか受け止めてほしかった。

そしてもしそんなことが可能なら、今ここにこうして在ることに少しでも意味があるのかないのか、マキに教えてもらいたかった。

『以上のような重い内容をLINEで伝えるのはとてもムリ。やはり直接会って何とか伝えるすべを思いつかなくては』

レジのほうから店員の話し声がきこえた。新しい客が入店したようだ。この部屋を選んだかもしれない。机からメロンソーダの入った紙コップを持ち上げると、ソファのリラックスングを真っ直ぐにもどした。

リラックスングシートをマックスまで倒すと、スマホのLINE画面をチラッと見てはため息をつき、また胸の上に携帯をポトッと落とした。

火曜日の夜七時半過ぎ。あの土曜日からずっと、ほとんどの時間をネットカフェで過ごしている。一度も部屋にもどっていない。といても乾の家に近いあのネカフェにずっと居ついてるわけじゃない。く、あちこちの店を転々としている。まるで指名手配中の容疑者だ。まあ僕の場合、誰にも探されてないけど。

バイトについては日曜日の朝、主任の本間さんに『高熱のため休みます。声が出ないのでLINEで失礼します』

送信しておいた。すぐに返事が、
 『うわあ痛いなあ！　頑張って速攻で治して出てきてね』

文末には心配そうな顔の絵文字が添えられていた。

月曜の朝また欠勤のLINE、返信は『はい』の二文字のみ。そして今朝は：既読スルー。

『明日以降どうすればいい？ 明日は休みだから明後日以降か。』

『そうなんだ、問題は明日、仕事より何より明日のデートだ！』
僕はソファから背をはがし、パソコンデスク上の長財布を持ち上げた。チャックを開き、レシートやクーポン券など紙束の中から大きな切符を抜き取った。近鉄特急伊勢志摩ライナー八号車一二B席、待ち合わせは列車の隣り合った座席。

起き上がった拍子に胸から太腿に転げ落ちたスマホを拾い上げた。またLINEアプリを開き、トーク画面からマキの名前を押した。今日の昼過ぎ来たメッセージは、

『明日、行ける？』

毎週火曜日ホテルでの僕のシフトは決まってマキのいるペストリーの洗い場だった。代わりのスタッフが入ってるのを見て僕が欠勤してるのを知り、もしかして体調不良で三日間休んでも噂に聞いたかもしれない。

なら不快感を抱かせることなくスムーズに断れるはずだ。早いほうがいい。そう決心してメッセージを打ち始めたのは六時前だった。『残念だけど、また別の日に、必ず』

自分の書いた文面を見てハツとした。別の日なんて、もう永遠に来ないじゃないか！

打ち込んだばかりのメッセージを、誤作動で送信されないよう慎重に一文ずつ削除した。

それから二時間足らずの間にもう何十回目だろう、僕はソファにドツと背を沈めると、リクライニングを倒し、マキのメッセージを見てはため息をつき、携帯を胸に落とした。

水曜日になってしまった。明け方の午前五時。テレビに切り替えたパソコンの画面に天気予報が静止画像で映っている。日中は雲が多く最高気温は二十九度、絶好の行楽日和だ。

昨日の夜悩みに悩んだ末、さすがにタイムリミットと八時過ぎにマキに送ったメッセージは、

『OK！ 約束どおり一〇時二〇分発の指定席で』

あらためてLINE画像をじっと見つめる。まるで誰かに乗っ取られたみたいだ、とても自分で入力したとは信じられない。

『その下の返信は』

『よかった：：じゃ、よろしく』

着信は二〇時五三分、それから一睡もしていない。いや正確には何度かウトウトしたけど、浅い夢のなか暗闇に浮かんでるのは僕の送信とマキの返信を映したスマホ画面、目を開けて

見てる景色と全く同じで寝てるのか覚めてるのかわからない状態がまだ続いている。

特急の発車時刻までに、なんとか解決の糸口を見出さねば……。ふと見ると、パソコンの奥、デスクライトの後ろにできた暗がり、白い糸が真っ直ぐ垂れていた。上に上にと目でたどると、鉄骨や配管のむき出した天井まで伸びている。

ああよかった、これが解決の糸だ、この糸をたどって上まで登っていけば……。いや待てよ、一般的なイメージにならないの？ 下の方も見てみよう。

僕は立って糸が降りていく先に目をこらした。洞穴のように暗くてよく見えない、とりあえず引っぱってみよう、両手で引っぱると何の重みもなくスルスル巻き取られ、そのうち手を動かしてないのに、どんどん糸は勝手に弧を描きながら下のほうから浮き上がってきた、もう僕の手の平からあふれ、手首に腕にグルグル絡まり、それがだんだんきつく締まって――

一〇時になった。ソファから身を起こすと空の紙コップを取り、ドリンクバーへと向かった。アイスコーヒーのボタンを押し、チョコチョコ落ちてくる黒い液体を見つめながらまだ答えを探していた。発車まで二〇分を切っているのにつこうゆったり構えているのは、今いるマンガ喫茶が特急の始発駅の真ん前、徒歩五分圏内に位置するから。

ゆつくりとコーヒーを飲み干し、店員の男女が見つめ合いながらヒソヒソ喋るカウンターの過ぎ、ドアを抜けて目の前にそびえ立つ駅ビルが見えても、まだどうしていいかわからなかった。

横断歩道を渡って駅のコンコース入口を潜り、デパートやホテルと一体化した吹き抜けの高い天井の下、行き交う人々に時々ぶつかりながら電光掲示板へ近づいている間も、足が勝手に動いているみたい

に何も考えてなかった。

『特急 鳥羽ゆき 2』

改札にキップを差し込み通り抜けて二番ホームへ行くと、赤と白のプラモデルみたいな光沢を放つ列車が停まっていた。

八号車が一番後ろだからすぐに乗れた。客室を隔てた扉の前に立つと開き、中が見えた。一二番席は後ろから四番目だった。窓際のシートは背もたれの上から、黒い髪のとっぺんがのぞいていた。

すぐそばまで来ると、窓に額をくっつけて外を見ていた。僕は隣の席に座った。

「まもなく発車します。お座りになって――」
車内放送が流れると、マキは手前に引き出したテーブルの上の携

帯画面と車内の様子を交互に見比べては、腰を浮かせたり落としたりした。

発車のベルが鳴った。急に名前を呼ばれたみたいにハッとマキは起立した。ドアが閉まると同時に、バッテリーが切れたみたいにペタンと座った。反射的に僕はマキから目をそらした。

「皆様、本日はご乗車いただきー」

車内はガラガラで、周りに乗客はいなかった。一番前のほうに五、六名、同じ小冊子を拡げ声高に語り合う高齢者の男女、あとはポツポツ、スーツ姿の男がいるだけだった。

「次に車内の設備についてー」

ポケットから携帯を出した。マキのLINEトーク画面を開くと、空白のメッセージ入力欄を叩いた。最初のひと言の、たったの一文字すら打てない。

「出来立てのコーヒーやお菓子などの自動販売機がー」

恐る恐るマキのほうを見た。同じことをしていた。眉を寄せ頬杖ついて、画面下のほうに並んだあかさたなの上で指をさまよわせていた。

「次の停車駅は大和八木、お乗り間違えのないようー」

次の瞬間、僕の親指はめくるめく速さでスマホ上を駆け巡っていた。

「アッ、乗る列車まちがえた！ ゴメン、すぐに追っかけるから、スヌーピーカフェで待ってて」

迷わず送信の矢印を押した。

マキの手の中で携帯が震えた。画面の上端にメッセージが浮かんだ。マキの細長い目がさらに細くなり白く光った。スマホを裏返しパチンと音を立ててデスクに置いた。恐ろしく深いため息をついた。

しばらくして膝の上のショルダーバッグを開いたマキは袋入りのお菓子を取り出しスマホの横に置いた。次にサイドポケットから白いワイヤレスイヤホンを出すと耳に差した。携帯を表に向け音楽アプリを開くと曲を選んだ。

爪先でリズムを取りながら、袋から出したひと口サイズのケーキの封を切り食べ始めた。ニヤニヤ笑いながらLINEを開いた。

さつき送ったメッセージに既読が付いた。その下に文字が浮かび上がった。

『急いで、遅刻は一時間まで』

スヌーピーカフェは伊勢神宮に程近く、参拝客でにぎわう石畳の通り沿いに軒を連ねる多くの店の一つだった。

時代劇の呉服問屋を思わせる上品な木造家屋の店頭にはスヌーピーのキャラクターたちが板塀、のれん、木製ベンチなどにさりげな

く配され、和の佇まいにマッチしていた。そんなウツドストックのプリントされたのれんの蔭から、そっと僕は店内をのぞいた。

クリーム色の壁に囲まれた店内は明るく照らされ、あちこちに置かれたどれも木製の棚や台の上には所狭しと色んなグッズやスイーツが並んでいた。そのまわりをほぼ全員女性の客たちが押し合うように揺れていた。

店の奥に閉まったガラス戸の前に、数名の客が並んでいた。ガラスの向こうにあるカフェコーナーの順番待ちの行列だった。先頭にマキの姿があった。

『三十分位で着く 並んどいて』

三十分前に僕がLINEしたのだった。

ガラス戸が開き、青い頭巾をした店員の笑顔がのぞいた。マキは指で「二人」のサインを出し、中に入った。

僕は店内に足を踏み入れ、うねる人波にさらわれながら奥へ奥へ、やっとガラス戸の前まで来た。しばらく待つとまた開き、次の二人連れといっしょに中へ入った。

二人掛けのテーブル席の窓際にマキは座っていた。テーブルにはスマホと、その横にソーサー付きのコーヒークップがあった。薄茶色した飲み物の表面にラテアートで、スヌーピーの顔が滲んでいた。遅刻はもう一時間になろうとしていた。僕はスマホを出した。

『やっと着いた！ 今目の前にいるよ』

ハッとスマホから顔を上げたマキと目が合った。

『ほら、いるだろ？ 注文は君と同じもので』

マキの顔に何かの熱病みたいに、みるみる赤い斑点が浮かび出した。

『わからないの？ だったら証拠を』

証拠、明らかな証拠、けれど誰をもおびやかさない、この場にふさわしい――

『そうだ！ スヌーピーには悪いけど』

『このスプーンで』
焦って文字を打ち続けながら、もう片手でソーサーからスプーンを取り上げた。

突然マキが立ち上がった。ガタツとテーブルが揺れた。両隣りの客が驚いた顔で振り向いた。

もうバッグをつかみスマホを投げ入れたマキは、出したサイフから千円札をテーブルに飛ばし、駆けるように店を出ていってしまった。

テーブルの上に、倒れたカップから液体が流れていた。その中にかすかに、さっきまでスヌーピーの顔をしてた白い泡が混っていた。

打ちかけていたメッセージを消すため携帯を見た。
『このスプーンでスヌーピーの顔をかき混ぜてしまおう』

もう空は暗い青とオレンジ色に染まっていた。時刻はまだ七時を過ぎたばかりなのに、辺りには飲食店のネオンも高層ビルやマンションの外灯もないから、すでに夜そのものの暗さに包まれていた。ここは一体どの辺だろう？ カフェを出てから、人混みを離れなべくひっそりした方面へあてもなくさまよい歩くうちここに来てしまった。

今は鉄棒しかない小さな公園のベンチに座っている。ここから見えるのは人気のない町工場や倉庫や駐車場、その間に古びた鉄筋アパートが挟まっている。時々車の走る音が通り過ぎる。そっちの方を見ると都会では見覚えのないコンビニの黄色い看板が光っていた。さつきから喉が渴いていた。自販機は近くになさそうだから、コンビニまで歩いて行くことにした。

広い車道を渡ると、大きなゴミ箱とその横にベンチと灰皿のあるコンビニの敷地内だった。

自動式じゃないドアの手すりを押して店に入った。レジを挟んで、初老の男女が向き合っていた。レジの中には家庭用の花柄エプロンを着け黒々した髪をたてがみみたいになでつけたおばさん、その前に痩せて背の低い、フランシスコ・ザビエル状に禿げた男が立っていた。

「ですからいつも言ってるでしょ、賞味期限切れの品でもあげるわけにいかないって」

肩をそびやかし強い目力で見据え、おばさんがいった。
うつむいたまま男は何度も小さくうなずいた。元々はスーツの上衣だったであろう、擦り切れたグレーの背広のポケットに入れていた右手をためらいがちに出した。レジの上に手の平をのせ、

「せめて百円だけでも、貸してもらおうわけには……」

おばさんは顔の前で大きく手を振ると、レジを飛び出し商品棚の向こうへ姿を消した。

男はまたうなずきながら口の中で何かブツブツ呟き、振り子人形みたいに左右に揺れながら肩でドアを押し出ていった。

僕はドリンクコーナーの前まで行くと、扉を開けポカリスエットを一本取り出した。そのままレジに向かうとサイフから、おばさんには見えないだろう小銭を出してレジの上に置いた。

外へ出ると、さつきの男がベンチに座っていた。すぐ横の灰皿を長いマイクみたいに傾けて顔に近づけていた。

そばへ寄ると、中の吸い殻を拾ってるのだとわかった。
男の隣りに座った。

灰皿から摘まみ終えた吸い殻をベンチの僕と自分との間に並べると、一本一本ていねいに捻じれを伸ばしはじめた。それが済むと背広のポケットに手を入れ、それだけは購入できたのかライターを出し吸い殻に火を点けた。

吸いながら、たえず何かを呟いていた。片言しかきこえないけど、身の上話のようだった。白い無精髭におおわれた頬に無邪気な笑みが浮かんでいた。

「人間、何にでも慣れるもんだね」

それだけ、はつきり聞き取れた。まるで自分に言われたみたいなのに、何となく、かすかに心が通じ合っているような錯覚に陥ってきた。

僕はポカリスエットを半分飲むと、吸い殻の横にペットボトルを置いた。

「もしよかったら」

ペットボトルに気づいた男は、そこに最初からあるのを知っていたみたい、さりげなく持ち上げ一口飲んだ。そしてまた一口吸うと、

「大丈夫、心配ない」

フィルタ―だけになったタバコを灰皿に落とした。

もう一本取るうとベンチの上に伸びた男の左手は吸い殻を通り越し僕の顔の前まで来た。パツと手の平を広げ、

「百円だけ貸してもらおうわけには……」

僕はサイフを出し、男には見えないかもしれない百円玉を手の平にのせた。